

旅日記

(3月13日)

朝食後、街へ出た。市役所の時を告げる人形等を見る。午後、ブッシュ教授宅を訪れ、弘志は初レッスンを受ける。夕刻、オペラ版「エスト・カイト・ド・ストリー」をカレドナー歌劇場へ観劇に行った。その道すがら、黄昏迫る街角で初老のロシア人バス歌手が異様のアコーデオンで伴奏で歌っていた。その豊かな声に私は私恋「ブラボー」を連呼した。彼の名はニカライ・サフラーフ。もとモスクワ国立歌劇場の歌手で

「今のロシアでは仕事が少なく、ミュンヘンに来たが、マネージャーが付かず、生活のため大道で歌っている」とのこと。理代が抵氏34度の冷気で赤く腫れた鼻の指を気遣うと、「私は大作曲家、主人の方が今日は7時間も歌って大変」と笑顔と流暢なドイツ語で返答された。10分ほど話し合い、名刺を交換した後、偉大なバス歌手は「明日はモスクワに帰れるんだ」と嬉しそうに話され、ステンカラー「長男」も、モスクワ郊外の「タベル」を歌って下さった。彼の音楽家の生き方と誇りを教わった気がした。路上の空缶に20マルク札を入れた。

↓ALEX・JACOBOWITZ氏に勝われ、連弾に大喝采



ゲルトナー歌劇場へ急いだ。公演中、街角の偉大な音楽家夫婦のご姿忘れられず、歌劇の記憶は薄いが、夫本に呼んで下さい。の夫婦の願いを叶えよう。私の誕生日は最高のもとなった。(3月14日)

ホテルの朝食は豊富なメニューのバイキング式。理代のお気に入り。正午前、私達が25年前まで暮らしたミュンヘン郊外の「グロッセ・ハッセルローエ」の駅に降り、私達夫婦の結婚、正志(長男)の出産地、援助頂いたドイツの親約存在のヴンターヴィ夫妻を訪問。昼食を頂きながら懐かしい話をした後、私が24才、理代



「移動するアコーデオンのシャロメ」を鑑賞した。(3月15日)

二回目の「ラジシク」教授のレッスンは、私達の母校、ミュンヘン音楽院であった。弘志の声の調子が良く、教授は「機嫌で、明日も来い」とのこと。レッスン後、音楽院の母の「リアプテーク」で古代の彫像を鑑賞してから、典型的なバイエルン食卓で豚とヒルの料理に

代のお気に入り。正午前、私達が25年前まで暮らしたミュンヘン郊外の「グロッセ・ハッセルローエ」の駅に降り、私達夫婦の結婚、正志(長男)の出産地、援助頂いたドイツの親約存在のヴンターヴィ夫妻を訪問。昼食を頂きながら懐かしい話をした後、私が24才、理代

世話になったのだ。夕刻、ミュンヘンに戻り、イタリア食堂で「マイチ」のスパゲティを食べ、昨日と同じゲルトナー歌劇場へ行くが、彼は先立、急遽、ミュンヘン国立劇場に向かい

が23才の時に結婚した教会を訪れた。礼拝堂は何もかもが昔のままで嬉しかった。キーキを買って再びヴンターヴィ家でお茶の時間を楽しんだ。帰る際、ヴンターヴィのママと理代が抱き合っており、私達は困って泣き出した。83才の長身のパパと私と弘志は困ってワインタを交わした。そう

言えば、ミュンヘン大学で経済学を学んだ理代も弟、周市朗君一家も、ここで世話になったのだ。夕刻、ミュンヘンに戻り、イタリア食堂で「マイチ」のスパゲティを食べ、昨日と同じゲルトナー歌劇場へ行くが、彼は先立、急遽、ミュンヘン国立劇場に向かい